ラブカクテルス　その８３

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラブカクテルス　その８３

【Ｎコード】
Ｎ１８７９Ｆ

【作者名】
風　雷人

【あらすじ】
今宵は大事な人のプレゼントにこんなカクテルはいかがでしょうか。ご賞味あれ。

いらっしゃいませ。
どうぞこちらへ。
本日はいかがなさいますか？
甘い香りのバイオレットフィズ？
それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。
少々お待ちください。
本日のカクテルの名前はハピネスホテルでございます。

ごゆっくりどうぞ。

私は悩んでいた。
来月の頭は嫁の誕生日だ。
結婚する時の条件として、毎回の彼女の誕生日には何かお祝い事として彼女の驚くようなイベントをしないといけない決まりとなっていた。
しかも去年ときたら、丁度三女の出産と重なり、大したお祝いとはいかなかったせいで、今年はかなりの期待をして、その企画を待っているに違いなかった。
しかし時間もそれほどない中、そろそろ期日は迫っている。
私は焦り始めていた。
さて、どうしたものだろうか。
そんな時に、仕事のお得意先から思わぬ話しが舞い込んできた。
それがこのホテルへの誘いであった。

招待された新築のそのホテルは、私が古くから仕事でお世話になっていた方がオーナーで、今までと違う思考のホテルということで、オープン前のモニターとしてその変わった思考を体験し、感想を聞かせて欲しいとの提案で、私は恐縮しながらもその話しに乗らせていただいた。
妻には詳細を教えていないが、なかなかのプレゼンとなりそうだと私はその内容を聞いて逆にワクワクした。
入り口前には今にも動き出しそうな凛々しい勇者の像と、それを取り巻く巨大な噴水が円形に広がり、その周りをロータリーとした甃の道路を三回転スロープを回りながら下った所がロビーのアプローチになっていた。
車を降りて早速ホテルに入ろうとすると、驚く事に上半身が人、下半身が馬の、まさにケンタウロスの男が、正装をして出迎えに来てくれた。
着ぐるみであろうそのリアルな半馬人は、荷物を受け取るとそれを軽々と持ち、そしてその馬である背中に私達を乗せていよいよ、ロビーに入っていった。
そのホテルに入った瞬間、そこはおとぎ話の中のようだった。
高い天井には高貴な貴婦人の優しい笑顔がなんとも柔らかく一面に描かれ、建物を支える柱にも細かな彫刻で天使や聖母らしき美しい像が立ち並び、私達をそれだけでも飽きさせない。
その迫力は圧倒してくるのではなく、何やら母親の抱擁のように包み込んでくるみたいだ。
その内、半馬人がさぁ、と私を下ろしたのはホテルのフロントで、そこに待っていたのは何とも凝った、タコだった。
ロボットなのだろうか？
これまたリアルな動きをしながら、私に名前を聞いてきた。
私は不思議そうな顔を隠せずに、そのタコに名前を告げると、タコ

は起用に八本の足をくねらせて、受付用の用紙を私に差し出し、それへの記入を求めてきた。
私は頷きながらペンを探すと、またもや驚いた事に、手の平に乗るくらいのかわいい妖精が、素早く飛んできて、書きやすそうなペンを手渡してくれた。
私はそれに目を疑うよりも輝かせて、お礼を言うとそれを受け取り、視線をあちこちに泳がせながらなんとか用紙の記入を済ませた。
それを確認したタコは、壁に幾つも掛けられている鍵の一つを長い足で取ると、私にそれを手渡し、ごゆるりと。と歓迎してくれたようだった。
私も家族も、ここまでの演出にかなりやられ、顔はニヤニヤしどうしであった。

かなり大きめなエレベーターに、半馬人の背中に乗ったまま上がった階は七階。
エレベーターの扉が開き、そこに広がる光景には、やはり思わず声が出た。
想像さえしないその光景は、まさに天国。
ホテルの中なのに天井には空がある。
緑の草原に優しい風がなびいている。
どこからともなく、小鳥のさえずりが聞こえてくる。
そこに一歩踏み出した途端、どこからともなく綺麗な歌声が私達を出迎えてくれた。
その声の方に視線を向けると、そこにはお姫様と小人達が合唱しながらこちらへやってきて、私達を歓迎してくれた。
これには嫁は元より、五歳になる長女も、三歳になる二女、そして生まれたばかりの三女までもが歓声を挙げながら感激し、そして子供達を囲んだ小人達は、あとの面倒はこちらに任させて頂きますと、慣れた感じで三人の手を取り、まるでこれから先には楽しい事しかないような表情で踊りながら、歩き出した。

そしてその後には楽し気な歌声が溢れて、子供達はまるでピーターパンに連れられたウィニー達のように不安の一文字も見せずに消えていった。
そして私も妻も、半馬人に大丈夫です。彼らに任せておけば何の心配もありませんの、妙に穏やかで自信に満ちたセリフになぜか納得し、その行き先を任せた。

ほどなく進んだその先には、緑の芝に囲まれた噴水のある広場の向こうに不思議と扉があり、そこを入るように促された私達二人に待っていたのは、スウィーツで出来た、まさにスウィートルームだった。
半馬人の説明によると、贅沢スウィーツルームというこの部屋全てが文字通りに甘いもので出来ていて、しかもどれを取って食べても構わないし、しかもいくら食べても太らないそうだ。
それを聞いた妻は喜こばない筈がなかった。
嬉しそうな表情を思い切り面に出して、あちこちを摘んでは、いちいちとろけるような笑顔で応えた。
半馬人はそれを、喜んでもらえて光栄ですと、荷物をクローゼット近くに下ろすと、ではごゆっくりとと、胸の前に手を当てながら丁寧にお辞儀をして去って行った。
私と妻はそれに手を振って見送り、そしてお互いを見合わせると、部屋の散策に移った。

さすがはスウィーツ、いやスウィートルームだけあって、まずはメインのベッドは、どうやらスポンジケーキでできていて、その弾力と言ったら、今までに味わったどんなベッドよりも柔らかく、甘い香りがした。
クローゼットは開けると同時にハンガーがパタパタと飛んできて、自ら服を羽織ながら所定のポールにキチンと収まっていく。
そしてテレビがある寛ぎのリビングはマショマロでできた座り心地

のよさそうなソファが置いてあり、それに腰掛けると、なんとマッサージをしてくれた。
なんて快適な時間だ。
そして一番の目玉はバスルームらしかった。
なにしろ開けたその部屋は、湖だった。
そしてそこに一艘の舟が浮いているのだが、その舟は変わっていて、舟の真ん中にベッドが二つ並んで置いてあり、その周りに花が浮かんだバスタブがある。
どういう仕掛けが隠されているのかと、私と妻は早速その舟に乗り込み、そのベッドに仰向けに横になった。
するとベッドは丁度いい傾斜をつくりながら顔を水面から出すようにしてゆっくり下がると、どこからともなくやってきた、まさにリアルな美しい人魚がそこに腰掛けてきた。
そしてその人魚は、まるでエステティシャンのように私達に触れてボディケアを施し始めた。
おまけに美しい音色のハープまで聞かせてくれると、舟は部屋のある岸まで自然とたどり着き、そしてバスルームを出た途端、さっきのハンガーが、今度はドレスとタキシードをパタパタと運んで来て、私達に手渡した。
これでどうやらディナーに行けということらしい。
早速私達は、その派手過ぎるくらいの衣装に手を通し、優雅な気分でレストランへと下りて行った。

レストランはまるで舞踏会のようだった。
私達がその入り口に入ると、まるで魔法でも掛けられたように周りは一斉に踊り出し、その中央まで進むと、先程のお姫様と一緒にいた子供達が、やはり派手な正装をしていて、私達を見つけた途端こちらに走ってきた。
その表情といったらとても嬉しそうで、なんだか話したい事が山の

ようにあるのがそれで判るほどだった。
しかしそんな暇も与えずに、流れのまま私達はいつの間にか踊りの中にいて、自然と動く体に任せてダンスをしていると、そのうちレストランの中心にいる私達をそこにいる皆が囲み、まるで何かの物語の主役みたいに二人は踊った。
曲の終わりと同時に決まったポーズの後には、割れんばかりの拍手がレストラン中に響き渡り、私達なんだか照れながらも胸を張ってお辞儀をした。
なんとも言えない充実感が二人、いや家族を包んだ。
その後は長いテーブルを囲い、私達は数え切れないほどの料理を前に、今まで味わった楽しかった出来事についてわいわいと語りながら食事を進めた。
普段は声を挙げながら子供にさせていた食事も、今夜は何も言わずに好きなように食べさせた。
今日は怒るという感情がなぜか湧いてこないのだった。
不思議なことだらけである。
食事がいいところになると、私達家族は部屋に引き返し、子供達をケーキのベッドで寝かせ、そして私と妻はもう少しこのホテルを楽しもうと、ラウンジへと出向いた。
しかしラウンジに行く階段はヤケに不気味で、じめじめした狭いレンガ造りの怪しげな雰囲気だった。
私達二人は手に手を取りながら恐る恐るそれを登ると、その先にあったのはただの丸い屋上だった。
あれ？と首を傾げていると、なんだかケタタマしい音がするので何かと思えば、なんとそこには巨大な竜が羽ばたき、次の瞬間いきなり妻を足に掴んで飛んでいってしまった。
私はしばらく呆気に取られていたが、それが大変な事だと気付き、慌ててロビーに向かって来た階段を夢中で下りた。
慌てた私に声を掛けて来たのはすれ違いざまの、さっきの半馬人だった。

半分パニックになる私を彼は落ち着かせてから話しを聞き、少し驚いた様子で、それならと私を背中に乗せた。
急いで向かった先には中世風の鎧兜や刀や盾、槍がある物々しい部屋で、半馬人はいきなり武装し始め、私にも鎧を差し出した。
私はなんだか解らないながらもそれを身につけて、兜を被ったところで妙に惹き付けられる光に気を取られた。
それはなぜか光る剣だった。
すると半馬人が、私にそれを抜くように言ってきたので私は迷いなくそうした。
軽いが何か力がみなぎる剣だと感じた。
私は半馬人の背に乗り込みホテルを出ると、なんとそこには何万もの兵士が待ち構えていた。
半馬人の声で一斉に彼らが私の方を向く。
私は叫んだ。
妻を助けに行くぞっー！
兵士達は歓声を挙げた。
地響きがするくらいの大群の移動が始まった。

竜の巣は黒い山の上にあった。
私達はその麓を囲み、そして叫んだ。
妻を返してもらいにきた！
すると山の上から数えられないくらいの竜がこちらに襲いかかってくる。
私は半馬人と兵士達と共に戦った。
すると上の方で妻の声が聞こえてきた。
私は次々にやってくる竜を勇者の剣で応戦し、必死に上に向かって声を張り上げていると、半馬人の手がいきり翼に変わり、飛び上がった。
私は妻の声を頼りに竜の巣に突進する半馬人の背中で鮮やかに剣を

振って、そして遂に妻を助け出した。
竜達は観念し、私達の群衆は勝利の歓声を挙げた。
そしてそのまま二人は半馬人の背中に乗りながらホテルの最上階にあるラウンジに降り立った。
さっきは何もなかったみたいだったが、その綺麗なラウンジは私達を迎えるとワインのグラスをカウンターに出して、もう少しある夜の一時にロマンスを添えてくれた。
二人は乾杯し、久しぶりにドキドキしたせいで昔の恋人気分に戻り、お互いが優しく緩やかな時間に浸れたのだった。

さて、チェックアウトしたのはいいが私は悩んだ。
こんな凄いホテルなんて思っていなかった。
しかし、リアルすぎるあの仕掛けは本当に作り物だったのだろうか。
それよりも、そのおかげで次の妻の誕生日に何をすればこれを超えられるイベントに出来るのだろうか？
帰りの車の中で寝ている家族を見ながらため息を吐きつつ、つくづくそう思うのであった。

おしまい。

いかがでしたか？
今日のオススメのカクテルの味は。
またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1879f/

ラブカクテルス　その８３

2011年1月26日05時52分発行